

# 1. 茶臼ヶ岳古墳群発掘調査報告

## 1. はじめに

この発掘調査は、京都府土木建築部が京都府京丹後市久美浜町橋爪の国道312号線において計画する、交通安全施設の建設に先立って実施したものである。

茶臼ヶ岳古墳群は、5基からなる古墳群として京都府遺跡地図に登録されている。<sup>(注1)</sup> 今回の調査にかかると5号墳、北側の矢田八幡神社境内にある1～3号墳とそこからさらに北西にのびる尾根上の4号墳である(第1図)。今回の調査地は、南側の国道312号線にほぼ平行する丘陵地で標高25～45mを測る。今回予定されている工事で削られるため、調査範囲にある5号墳の調査、さらにその他の古墳・遺構の確認も含めた本格的な調査となった。

調査の結果、5号墳が確実な古墳であると判明しただけではなく、5号墳をはさんで上位に古墳時代前期の古墳2基(6号墳・7号墳)、下位に弥生時代後期の台状墓2基(8号墓・9号墓)が新たにみつかった。さらに5号墳の墳丘上に経塚1基の存在も明らかとなった(第2図)。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛、同専門調査員黒坪一樹、調査第2係専門調査員石尾政信が担当した。調査面積は610㎡で、調査期間は平成19年10月29日から平成20年1月30日までである。調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会をはじめ、作業員、調査補助員、整理員の方々から御協力を得た。<sup>(注2)</sup> 心より御礼申し上げたい。

## 2. 位置と環境

久美浜町は京丹後市の最西端にあつて、西から久美谷川、川上谷川、佐濃谷川が流れ、各流域の狭い平野部や小高い丘陵上には多くの遺跡が存在している。茶臼ヶ岳古墳群は、川上谷川の中流域にあつて、その上流の須田というところに金銅製の環頭太刀で有名な湯舟坂2号墳(7世紀初頭)が、さらに今回の調査地に近い島の集落に前方後円墳である茶臼山古墳(4世紀後半)などがある。また茶臼ヶ岳古墳群の北西には、集落遺跡として著名な橋爪遺跡(弥生時代後期～古墳時代)がある(第1図)。

ここで茶臼ヶ岳古墳群の古墳および台状墓に関連する遺跡を周辺地域において概観したい。丹後地方の弥生時代における墓には、丘陵尾根上に土を削ったり盛ったりして階段状に造られた台状墓が圧倒的に多い。調査地周辺における台状墓の調査例は、他の丹後地域や、但馬地方と比較して少ないが、弥生時代中期前半からの遺跡が知られる。佐濃谷川流域における豊谷遺跡の台状墓がそれで、2基のうちの1号埋葬施設からは、22点にもおよぶ石鏃や折れた石剣などがみついている。当時の「戦い」を示す事例と考えられている。兵庫県但馬地方でも中期初頭の舟隠墳墓群(豊岡市)から複数の石鏃が出土した木棺墓が確認され、当時における社会情勢の一端を



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/50,000「城崎」・京都府遺跡地図第3版第1分冊)

うかがうことができる。

さらに弥生時代中期後半から後期にかけては、方形台状墓の規模が大きくなり、複数埋葬の人数・割合が多くなる傾向がある。そして、今回の調査でもみられた土器を破碎して墓壙内・棺外に入れる、いわゆる破碎土器<sup>(注2)</sup>供献は中期後半には出現し、後期に入って盛行する。これは丹後および但馬に共通する現象で、ガラス玉・鉄製品の多量副葬とともに、この時期の重要な特徴である。そして後期末には、赤坂今井墳墓（峰山町）や大風呂呂南1号墓（岩滝町）などの大型の墳丘墓が出現し、首長の強大な力のピークを

この期にみる。

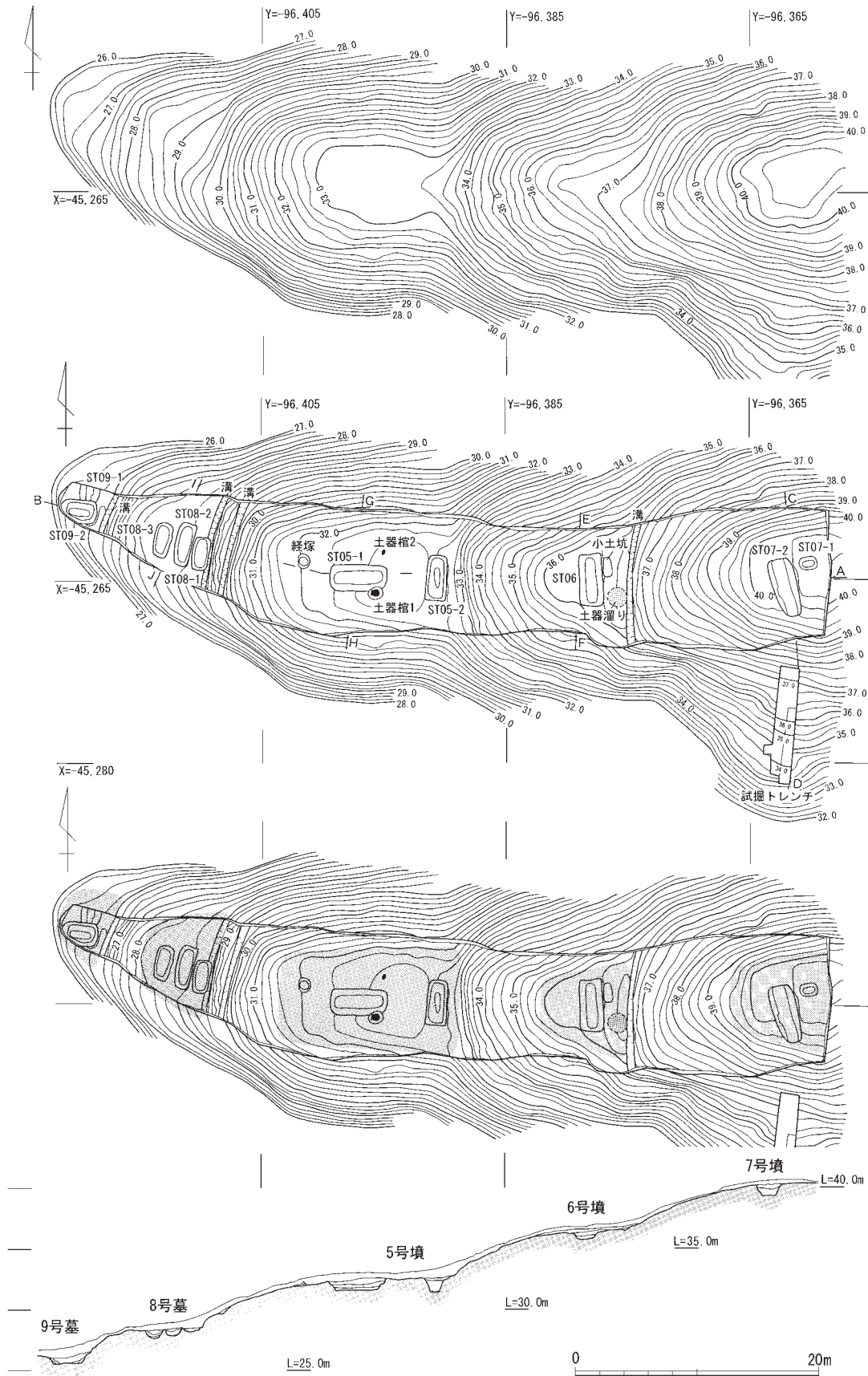
弥生時代から古墳時代への移行期、丹後では弥生時代の台状墓・墳丘墓と同じように丘陵上に古墳が造られる。大田南古墳群（峰山・弥栄町）はその最古（3世紀中葉）に位置付けられるが、茶臼ヶ岳古墳群周辺には、現在のところ本時期の古墳は見つかっていない。

次の布留式土器を指標とする古墳時代前期になると、久美浜町では3世紀中頃に蔵谷遺跡が、4世紀の中頃から後半に北谷1号・5号、南谷、権現山、堤谷などの古墳群が造られる。茶臼ヶ岳古墳群も前方後円墳築造以前の古墳群のひとつで、これらの古墳群と何らかの関係があったと思われる。

さらに茶臼ヶ岳古墳群の周辺では但馬地方とほぼ同時期に前方後円墳が出現する。4世紀後半の茶臼山古墳をはじめ、岩ヶ鼻古墳、陵神社12号墳、芦高神社古墳などが築造され、次第に丹後地方は巨大古墳の時代となっていく。

### 3. 調査経過

今回の調査でまず直面した問題は、掘削により大量に出る土砂処理であった。丘陵直下の国道に沿う南側は現住の民家が建ち並び、反対の北側斜面下は民地となっていた。そのため、大量の



第2図 調査前地形図および遺構（古墳、弥生墓、経塚）検出状況





第3図 土留め柵設置状況



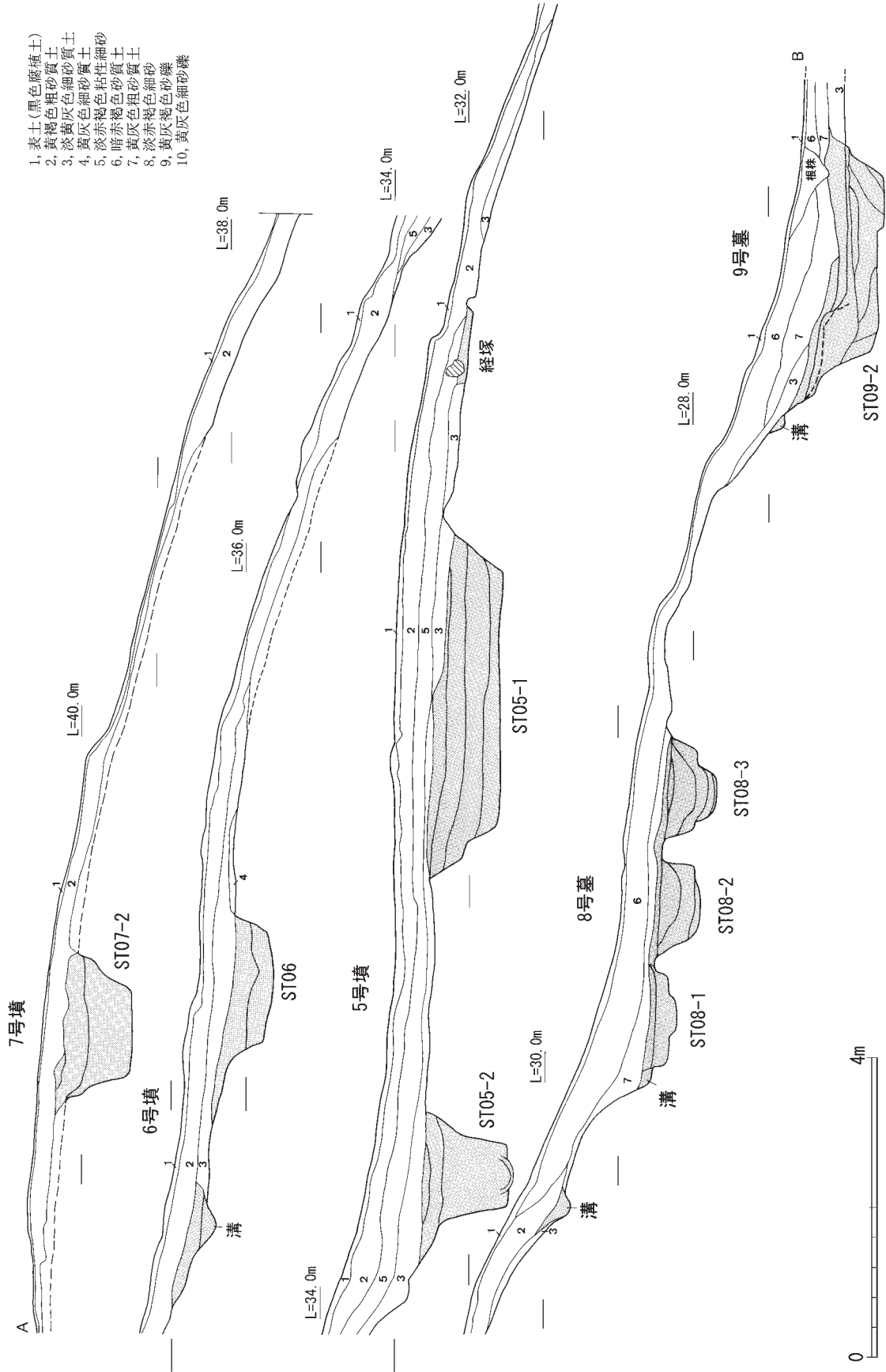
第4図 ベルトコンベヤー設置状況

掘削土を急斜面地に棄てたり、あるいは周囲に盛って留め置く事は、大雨の際などに土砂の流出・崩落で民家や畑に甚大な被害を及ぼす危険もあり、回避する必要があった。協議の結果、民家の範囲から外れる東端の南斜面にすべての土砂を捨てる方針をたて、土砂で埋まる部分に調査トレンチを設定し、遺構の確認作業を急いだ。遺構がなかったため、この部分に掘削土を集積することにしたが、万が一のことを考え、伐採範囲ぎりぎりに頑丈な防護柵の設置工事（第3図）を施し、さらに国道から段差をもって拓けている畑地（丘陵裾）にも土留め柵を巡らせた。

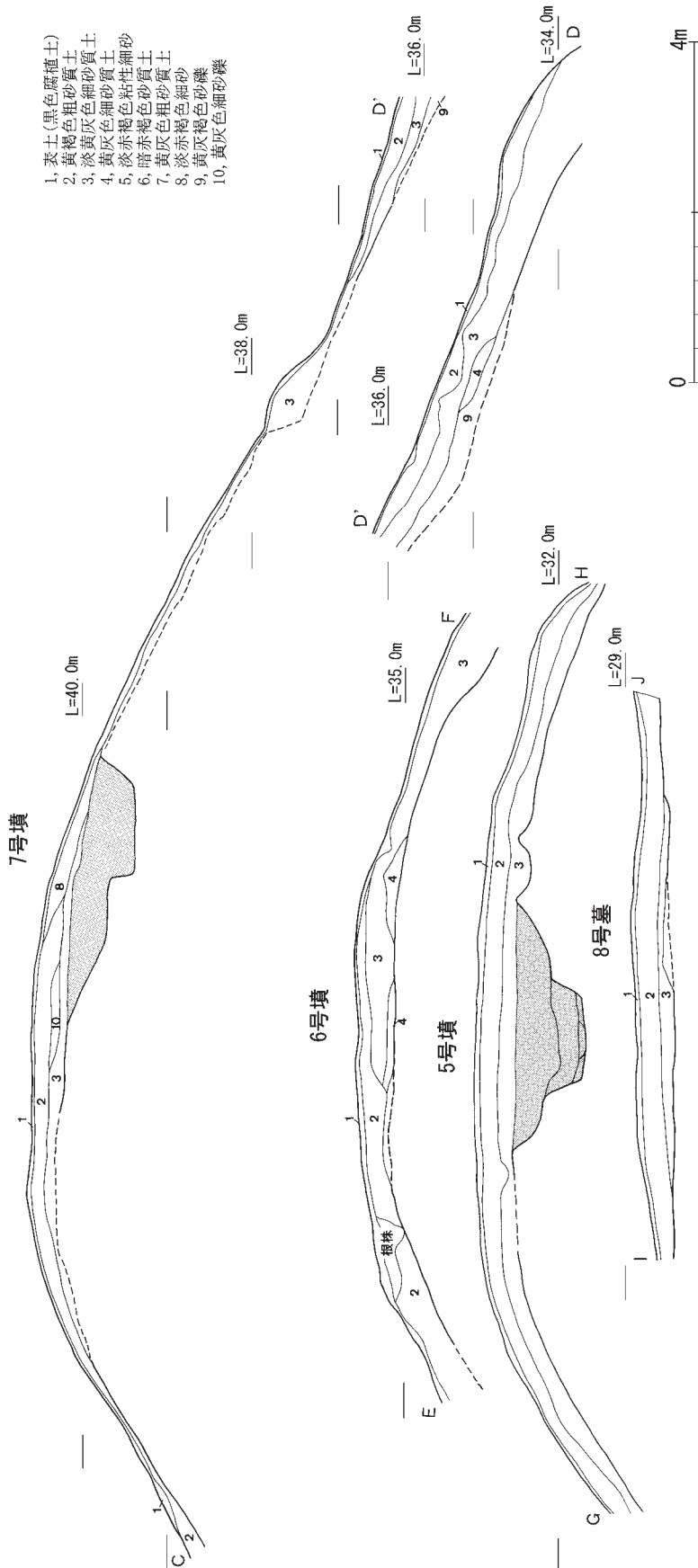
次に、急斜面と民地に囲まれているため、表土掘削のための重機を入れることができず、掘削はすべて作業員の人力で行った。先の経緯から、下の古墳の掘削土もすべて東側に運び上げて投棄しなくてはならず、そうした労力

を軽減するためにベルトコンベアを導入した（第4図）。これにより迅速な土砂搬出が可能となった。

掘削は最高所の7号墳から開始し、6号墳、5号墳、8号墓、9号墓の順で掘り進めた。根株起しには難渋したが、花崗岩の風化した細砂粒を主体とする覆土は掘削しやすく、また埋葬施設の識別も比較的容易であった。表土・覆土の掘削と同時に、埋葬施設の掘削もすすめ、11月中には7号墳と6号墳の掘削をほぼ終え、12月にはいって5号墳および経塚の調査をすすめた。それらをほぼ掘り終えたその年の終了間近、古墳はないと考えていたさらに下の狭い尾根部に、弥生時代後期の台状墓の存在を明瞭に捉えた。8号墓とし、3基の埋葬施設を確認するとともに、それらの墓壙内および棺内からは、土器、玉類、鉄器などが出土した。8号墳の掘削・記録をすすめつつ、今回の調査地西端で、最も低位にある尾根部を掘り進めた結果、そこからも弥生時代後期の台状墓（9号墓）を確認した。9号墓の狭い平坦地から2基の埋葬施設が見つかった。遺構掘削と並行して土層断面や埋葬施設などの実測および写真撮影を順次すすめた。1月24日にラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、27日には現地説明会を実施し、56名の参加を得た。そして1月30日、記録作業のすべてを終了した。



第5図 墳丘(古墳、弥生墓含む)土層断面図(東西方向)



第6図 墳丘(古墳、弥生墓含む)土層断面図(南北方向)

#### 4、土層

丘陵部は花崗岩の風化砂質土から成る地盤で、それを削り出して平坦面を造り、そこに埋葬施設を設ける。盛土は基本的に施されない。薄い表土(1層)の下は、黄褐色粗砂質土(2層)、淡黄灰色細砂質土(3層)、黄灰色細砂質土(4層)、淡赤褐色粘性細砂(5層)、暗赤褐色砂質土(6層)など、いずれも砂質土や細砂が堆積している(第5・6図)。

#### 5、遺構と遺物

検出遺構は、3基の古墳時代前期の古墳(5・6・7号墳)、2基の弥生時代後期の台状墓(8・9号墓)、1基の平安時代の経塚である。古墳と台状墓からは、それぞれ1基または複数の埋葬施設が見つかった(第2図)。出土遺物は、古墳・台状墓からの土師器、弥生土器、玉類、鉄製品、経塚からの土器類と石製品である。

以下、5号墳から9号墓まで、①墳形・規模・外表施設、②埋葬施設と出土遺物、③その他の遺構と遺物

について説明する。なお、①の規模はいずれの古墳、台状墓とも墳頂部の規模ということで、墳丘の全体の大きさについては正確に判断できなかった。

### (1) 5号墳

#### ①墳形・規模・外表施設

墳頂平坦部の形と大きさは、隅丸長方形で南北 6.5 m、東西 14.5 m を測る（第 2 図）。墳頂部のみ整形され、裾部の基底ラインは不明瞭で人工的な地形の改変は認められない。土層断面の観察から盛土は存在していない。

#### ②埋葬施設と出土遺物

埋葬施設は、木棺を納めるもの 2 基（ST05 - 1、ST05 - 2）と、土器棺墓 1・2 を合わせた計 4 基である（第 7～9 図）。

#### 埋葬施設 ST05 - 1（第 7 図上）

平坦部のほぼ中央に掘り込まれている。東西に主軸をもち、長辺 4.2 m、短辺 2.8 m、墓壙最下底までの深さ（以下深さとする）1 m を測る。平面形は隅丸長方形である。

墓壙は二段に掘り込まれている。二段目の最下面にわずかな土色の変化がみられ、東側が細く尖ることから舟底状のくり抜き式の木棺（推定長さ 2.75 m、同幅 50～60cm）が納められていた可能性が高い。墓壙内および棺内から遺物の出土はみられなかった。

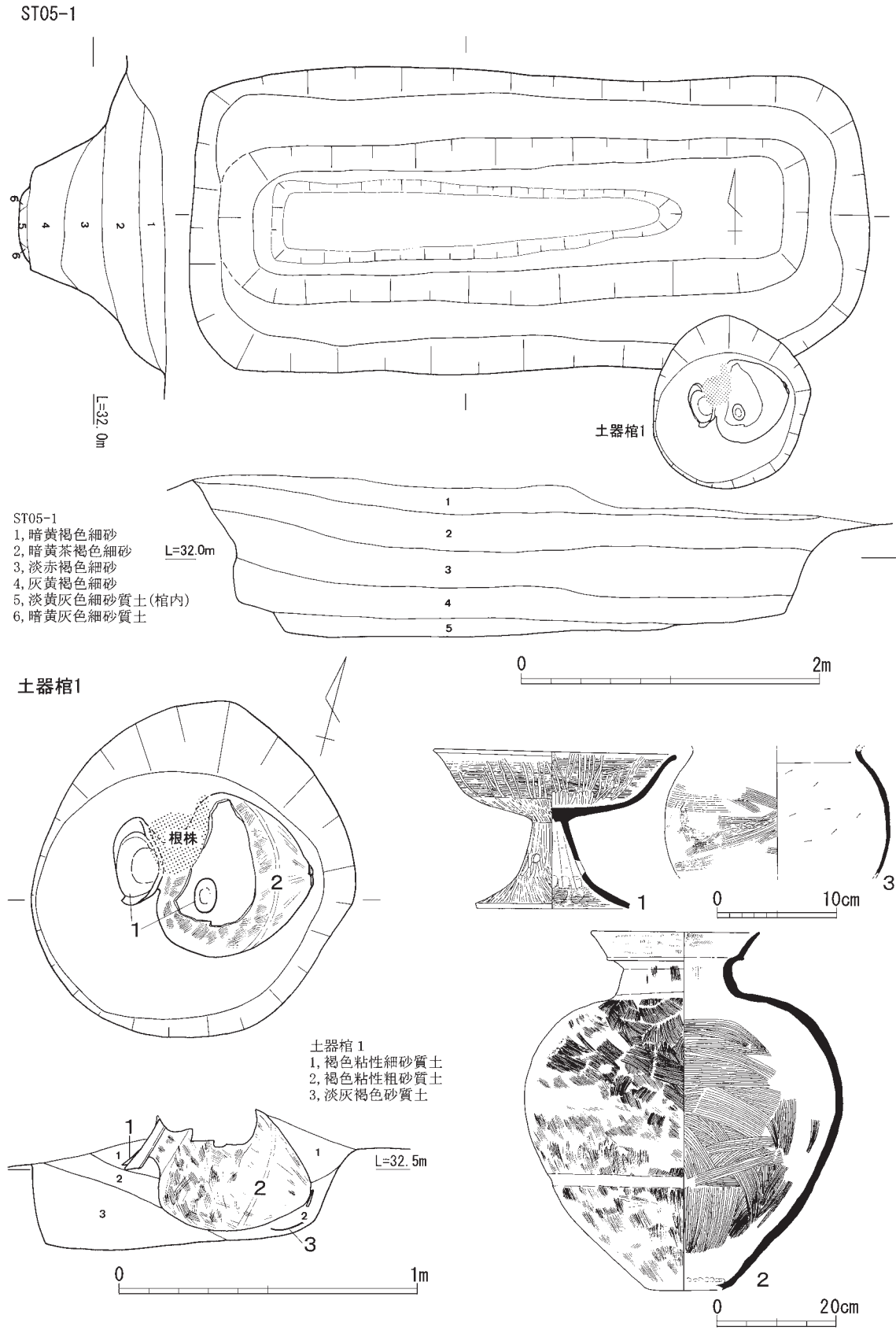
#### 土器棺墓 1（第 7 図下）

埋葬施設 ST05 - 1 の南東隅の一部を壊して造られる。平面形はほぼ円形で、直径 1.1m、深さ 35cm を測る。中に大型の複合口縁壺（第 7 図 2）が、口を西側斜め上にして埋納されていた。口縁部は土師器の高杯（同図 1）で塞がれていた。高杯の脚柱部は壺の体部内に側に落ち込んでいた。壺の底は直径 10cm ほどの穴が内側から開けられ、別個体の土師器片（同図 3）でその穴を外側から塞いでいたとみられる。

出土遺物は、土師器 3 点である（第 7 図 1～3）。1 は高杯である。器高 13.4cm、杯部の口縁部径 20cm・同深さ 5.3cm、脚部底径 12.8cm を測る。暗赤褐色および橙褐色の精良な胎土・焼成である。杯部は深く口縁端部はのびやかに外反し、内外面とも細かなハケ目調整や、暗文状のミガキ痕がみられる。孔を 3 か所に開けられ滑らかなカーブで開く脚柱部も細かなミガキで調整されている。類例としては、布留 I 式期（古墳時代前期中頃）とされる北谷 1 号墳出土の高杯がある<sup>(注4)</sup>。2 は、土師器の壺または甕の体部片である。外面ハケメ、内面ケズリの調整がみられる。3 は、器高 60.6cm、口縁部径 28.5cm、体部最大径 53.5cm を測る大型複合口縁壺である。砂粒を多く含む淡黄褐色の胎土である。外形は、明瞭な袂りをもつ山陰系の特徴を備えた口縁部、肩が大きく張り出す体部、そこから滑らかにすぼまる平底の底部となる。底部は意図的に内側から割り貫かれている。口縁部および体部の調整はナデおよびハケ目である。体部外面は幅のつまった右下がりの短いハケ目が、内面は幅広の長いハケ目が縦横に施されている。

#### 土器棺墓 2（第 8 図）

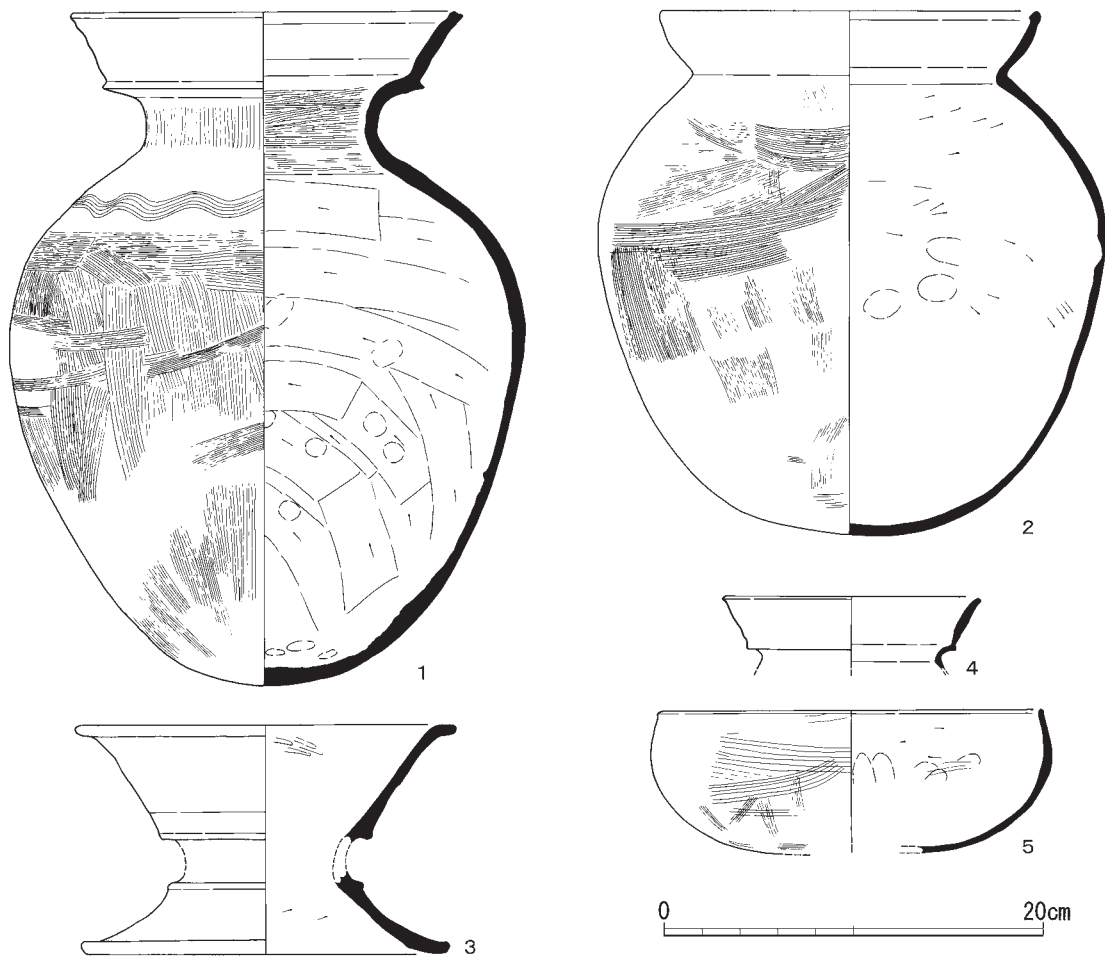
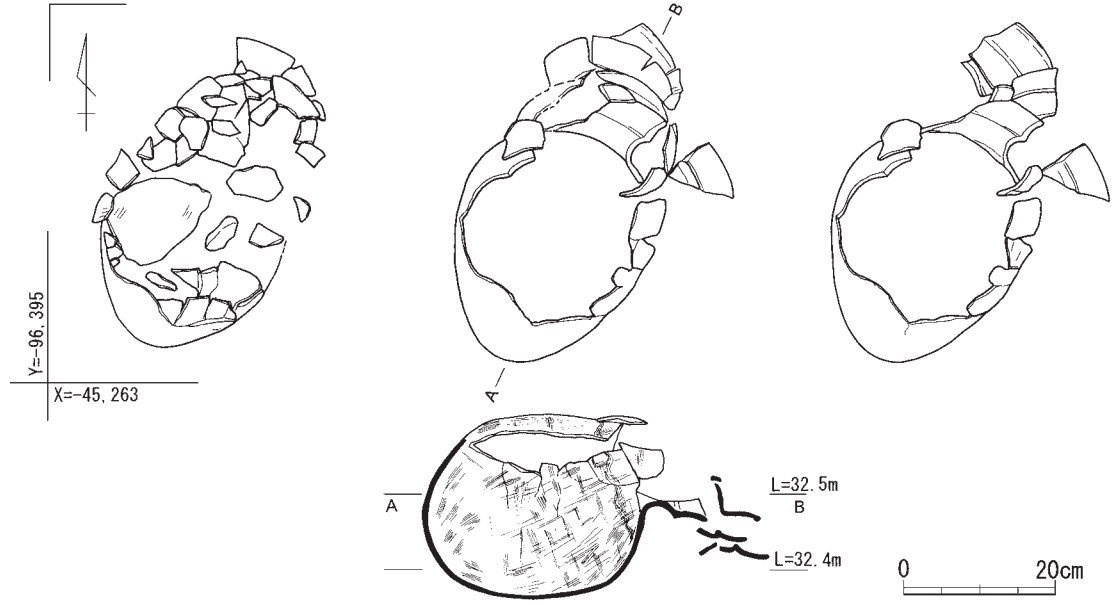
埋葬施設 ST05 - 1 の北東約 2 m の地点に設けられ、土師器の複合口縁壺と甕を組み合わせた



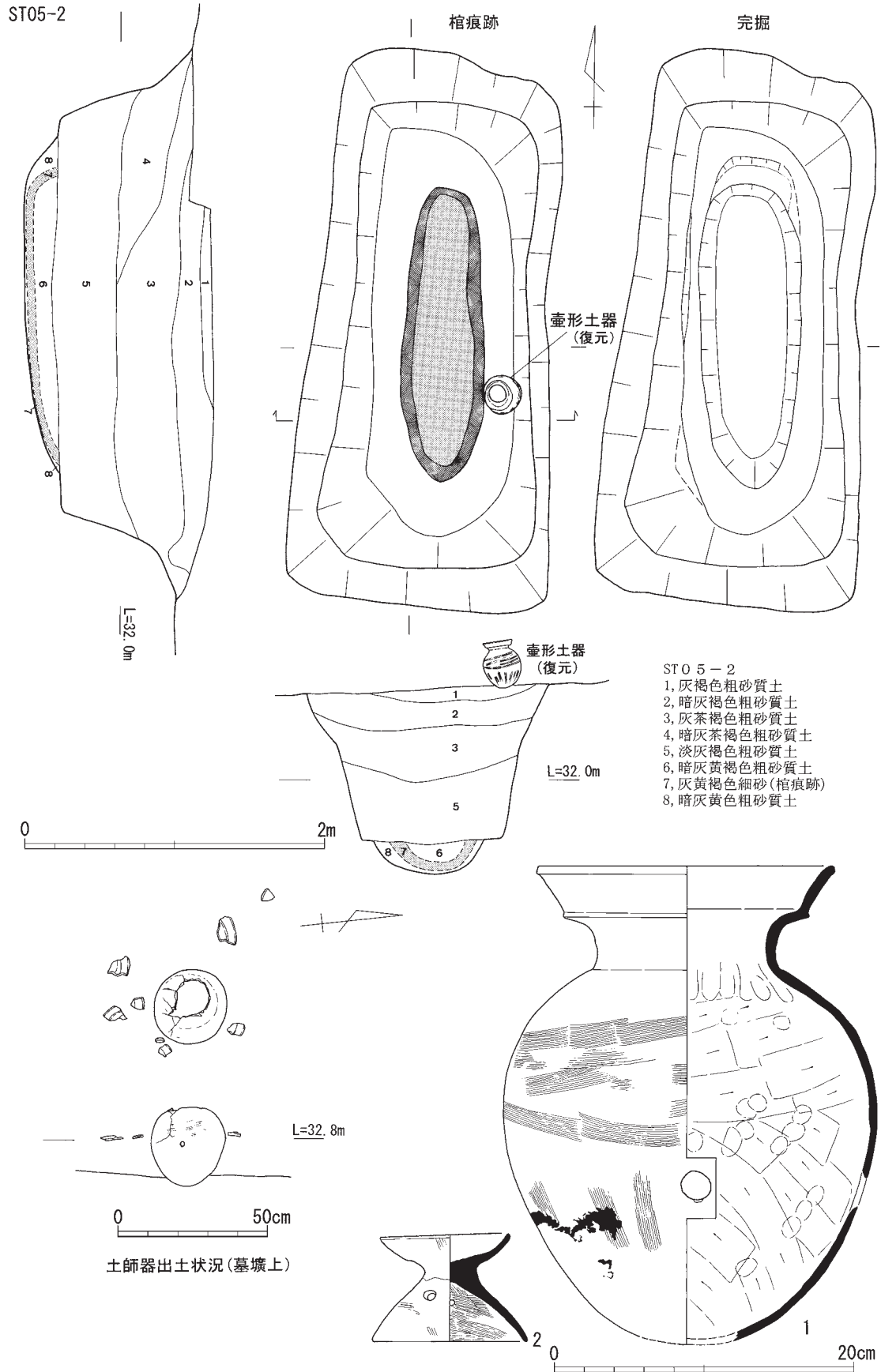
第7図 5号墳埋葬施設 ST05 - 1 および土器棺墓1と出土土器



土器棺2



第8図 5号墳土器棺墓2と周辺出土土器



第9図 5号墳埋葬施設 ST05-2 および供献土器

ものである。横倒しになった完形の複合口縁壺(第8図1)の口縁部に、布留式の特徴をもつ甕(同図2)の破片(体部上半から口縁部)を被せている。合せ口の組み合わせに際し、甕をこの場で破碎し、不必要な破片を複合口縁壺上に散布している。壺の中に流入した土を丁寧に洗い出したが、人工的な遺物、自然遺物ともなかった。これら2個体で構成された土器棺墓2は古墳時代前期前半の布留I式期のものである。

周辺から鼓形器台と複合口縁壺および椀が出土した(第8図3~5)が、これらは土器棺墓2に伴うものであるかは不明で、特に椀は新しい時期のものであろう。

出土遺物は、土師器3点である。第8図1の複合口縁壺は、口縁部径20cm、頸部径12.2cm、体部最大径27.2cm、器高35.5cmである。外反する口縁の屈曲部は、稜が非常にシャープある。橙褐色で砂粒の多い胎土である。頸部内外面および体部外面はハケメ、肩部には櫛描波状文が施される。体部内面は頸部のハケメが終わる部分からヘラケズリ調整される。2の布留式甕は、丸底で、口縁端部を肥厚させ、やや張る体部をもつ。口縁部径19.8cm、体部最大径27cm、器高27.6cmである。淡褐色を呈し0.5~3mmの砂粒を多く含む。3は鼓形器台である。脚台部に比して受け部が長いタイプで、頸部の稜は明確に付けられている。復元ながら口径19.5cm、底部径18.8cm、器高12cmを測る。淡黄褐色の胎土をもつ。4は山陰系複合口縁壺の口縁部で、口径13.7cmを測る。5は赤く焼かれた土師器の椀で、口径20cmを測る。3および4とは時期を異にし、5世紀以降のものであろう。

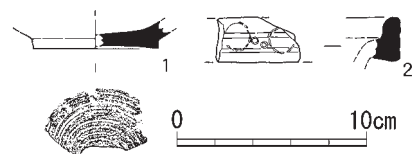
#### 埋葬施設 ST05 - 2 (第9図)

東側上位の6号墳との境に造られた木棺墓である。南北を主軸にもち、長辺3.7m、短辺1.5~1.8m、深さ1.25mを測る、北辺をやや狭くするが隅丸長方形に近い。上位からの土砂が厚く堆積するが盛土はない。

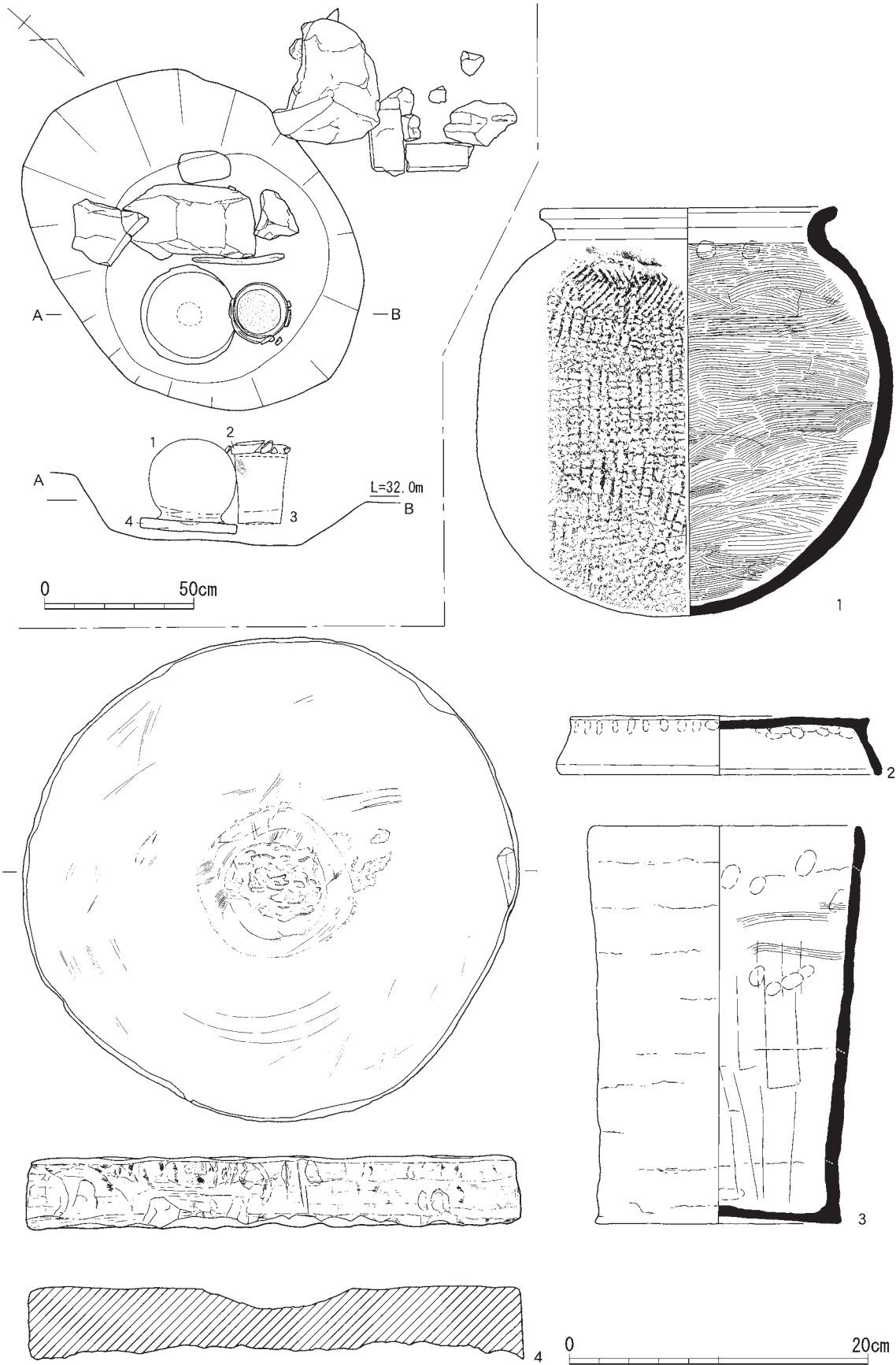
墓壙は、急角度で底まで掘り込まれ、平坦にした底面をさらに掘り込んで木棺を納める。土に置き換わった棺材の部分が明瞭に観察されたが、棺底面の識別はできなかった。棺形態は、くり抜き式の舟底状木棺で、南側の先端が舟の舳先のように尖る。木棺の大きさは、およそ長辺2m、短軸60~45cm、深さ20cmの残りである。墓壙内および棺内に、副葬品とみられる遺物はなかったが、墓壙の上面から土師器2個体が出土した。複合口縁壺と器台である(第9図1・2)。壺は口を上にして半分埋められた状態で、口縁部を意図的に打ち欠かれ、破片を散布させていた。埋葬儀礼に伴う破碎供獻とみられる。壺の中の土を丁寧に洗浄したが、人工・自然遺物とも認められなかった。

器台は複合口縁壺とほぼ同じか所から破片で出土し、接合作業により完形品となった。

出土遺物は、土師器2点である。第9図1の複合口縁壺は、口縁部径19.6cm、頸部径12.6cm、体部最大径25cmを測る。淡橙褐色で長石などの砂粒を多く含む胎土で、薄い器壁をもつ。外反する口縁端部、中間に最大径がくる球形に近い体部、丸底の外形である。口縁部の稜など、シャープなつ

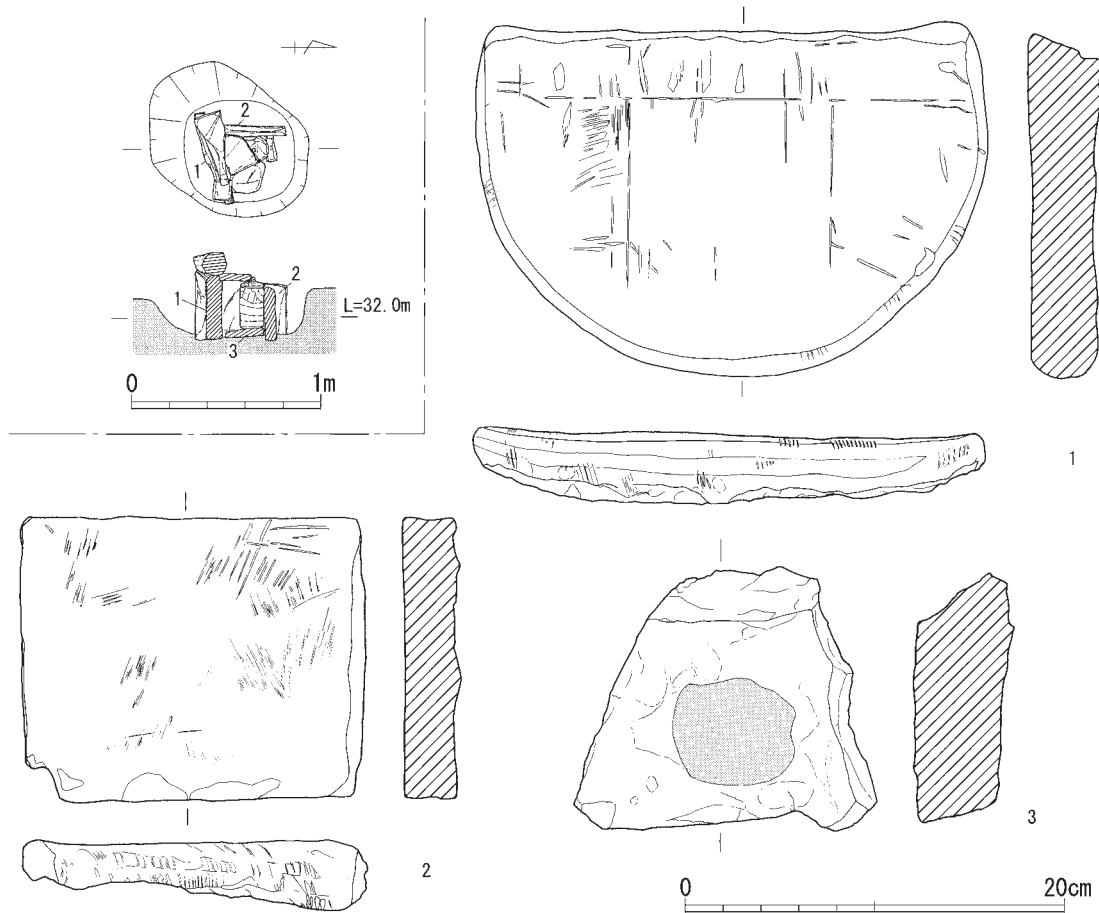


第10図 5号墳丘3層出土土器



第11図 経塚および埋納遺物（土器・石製品）





第12図 天王山B-1号墳丘の経塚石材（参考資料）

くりである。体部外面はハケ、内面は屈曲部よりやや下からのケズリで調整される。なお、体部下半の一か所に、径約2cmの穿孔がみられる。

同図2の器台は口縁部径8.5cm、器高7.3cm、底部径10cmを測る。橙黄褐色で石英・長石などの粒を含む胎土である。上部の小さく浅い受け部と、ややふくらみをもって開く脚部をもつ。脚部には孔が2か所にあけられている。5号墳では、2基ある埋葬施設の墓壙および棺内に副葬品を納めず、2基の土器棺墓や供献土器の配置にみられるように、墓壙上や周縁部を手厚くする葬法が特徴的である。

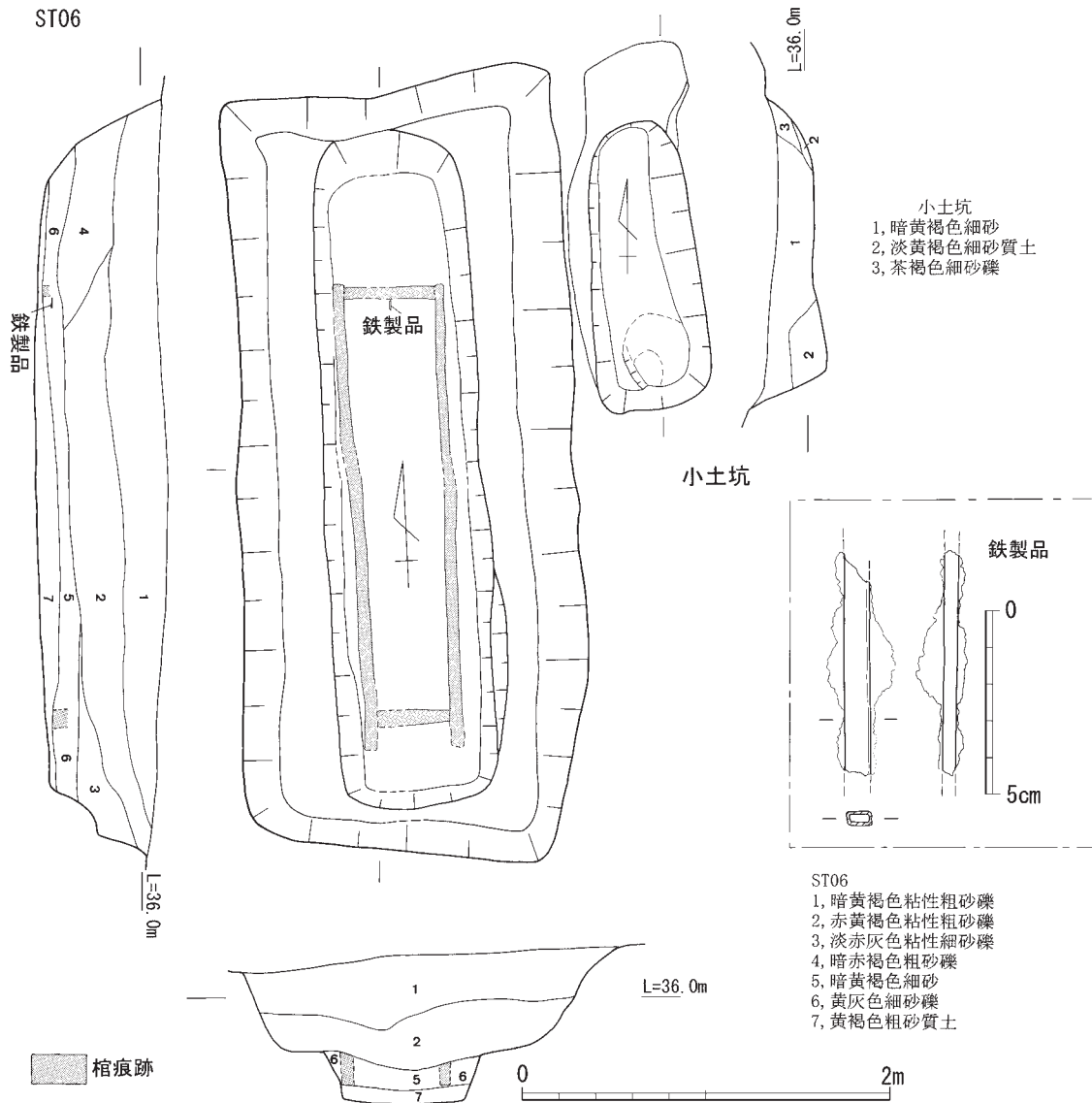
### ③その他の遺構と遺物

3層中から出土した平安時代の糸切り痕をもつ須恵器碗の底部片と、弥生時代後期の高杯または壺の口縁端部が出土した（第10図）。さらに経塚1基がある（第11図）。

#### 経塚

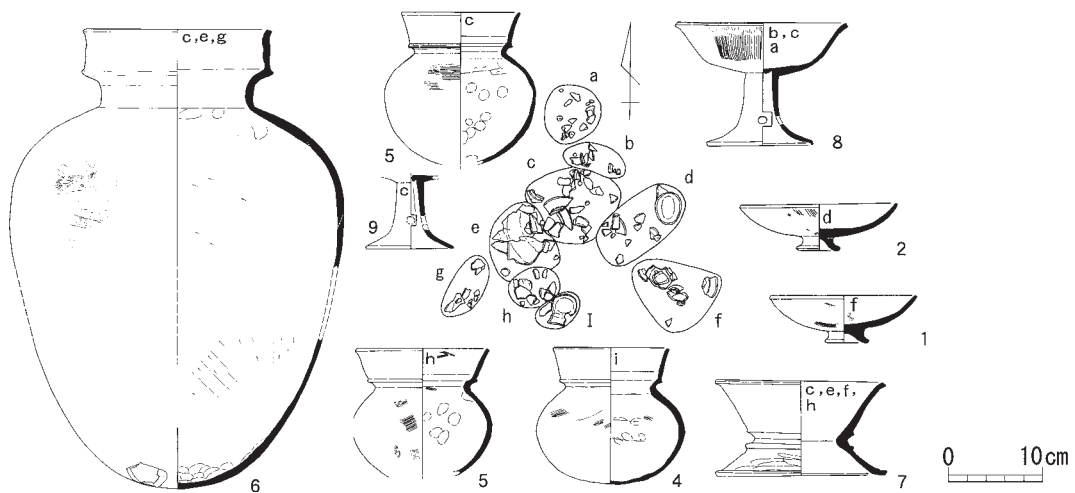
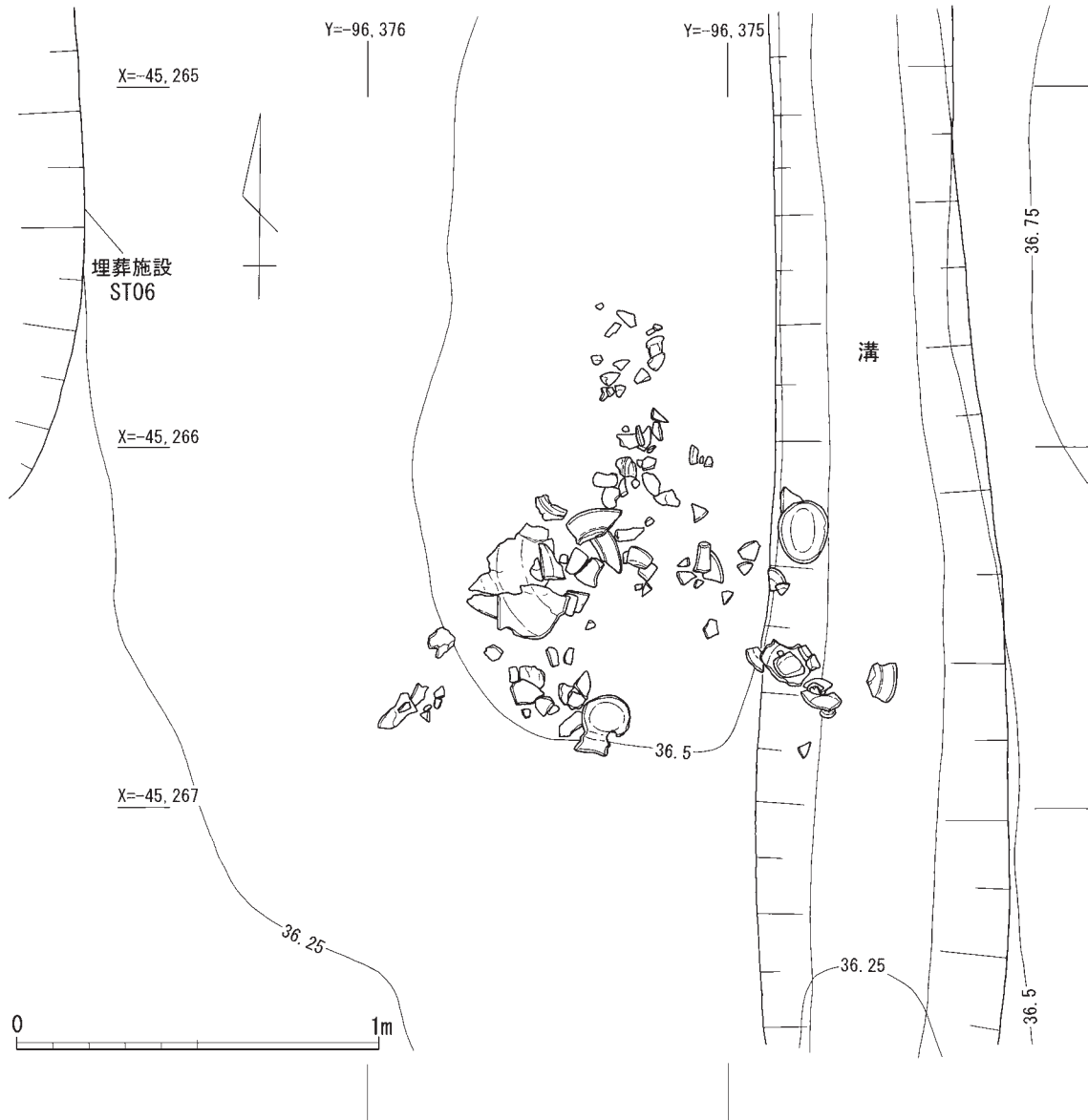
5号墳頂部の西端にあり、平面形は長径1.3m、短径0.9m、深さ20cmを測り、平面形は楕円形である（第11図）。中には、須恵器質の壺（第11図1）と、土師器質の蓋と筒形容器（同図2・3）が並んで納められていた。周辺に大小の角礫が散乱し、小規模な石組みがあったとみられる。しかし原位置をとどめるものは、壺と筒形容器に接して並ぶ3個の礫のみである。

出土遺物は、須恵器壺、土師製筒形容器一口および石製の台である。第11図1の壺は器高



第13図 6号墳埋葬施設 ST06・棺内鉄製品および小土坑

27cm、口縁部径 20cm、体部最大径 27.5cm を測る。短い口縁部に球形に近い体部をもつ。須恵器質ながら瓦質のような焼成である。体部外面に細かな格子目タタキ痕、体部内面に横方向のハケ目調整が顕著である。2は頂部が平坦な土師器質の蓋である。最大径 21.3cm、器高 4cm を測る。3は、土師器質の筒形容器である。ほとんど未調整の粗い造りで内外面とも橙褐色である。器高 26.6cm、口縁部径 17.6cm、底径 16.2cm を測る。4は、凝灰岩製の台である。ここに1の須恵器壺が口縁部を下にして伏せ置かれていた。素材を割り出して扁平な正円形に整形し、表面および側縁の全周を丹念に研磨している。丹精込めた逸品といえる。さらに表面中心部を直径 10cm、深さ 1.5cm で凹ませている。以前、センターで調査した久美浜町天王山古墳群 B-1号経塚の石組みを構成する礫に、同じく凝灰岩製で線刻の施された半円形の扁平礫があり、今回のもの(注6)に類似することから参考資料として掲載した(第12図)。



第14図 6号墳土器溜まり・溝平面図および個体復元状況



第15図 6号墳土器溜まり出土土器

(2) 6号墳

①墳形・規模・外表施設

墳頂平坦部の形と大きさは、台形に近い方形で南北7 m、東西6.5 mを測る（第2図）。土層断面の観察から、盛土は施されていない。東端に7号墳との区画を示す溝が1条掘られていた。ほぼ直線的で、断面形はU字形を呈している。長さは10 m、幅1 m、深さ30cm。

②埋葬施設と出土遺物

平坦部の中央部に1基の埋葬施設（ST06）と、その棺内より鉄製品が1点出土した。

埋葬施設 ST06（第13図）

長方形の掘形で、長辺4.2 m、短辺1.9 m、深さ0.8 mを測る。主軸は南北方向である。



二段に掘り込まれた墓壇の底に箱形木棺が納められたとみる。棺材が木質に置き換わった痕跡(厚さ約7cm)から推すと、棺の大きさは長さ2.5m、幅0.55mを測る。

出土遺物には、棺内からの鉄製品が1点ある(第13図右)。意図的に破損されたヤリガンナの断片とみられる。残存長6cm、幅7mm、厚さ4mm、重さ7gを測る。

### ③その他の遺構と遺物

#### 小土坑(第13図)

北東部に隣接して小土坑が1基ある。長さ1.6m、幅0.6m、深さ20～40cmを測り、南側が深く掘られている。棺痕跡や遺物もなく用途・性格は不明である。

#### 土器溜り(第14・15図)

7号墳との境にあたる墳丘東端で、破損した状態の土師器が多量にみつかった(第14図)。南北1.3m、東西1.5mの範囲である。埋葬儀礼に伴い破碎供献された土器群と考えられる。互いに離れている破片の接合例も多い点から、意図的に破碎して散らされたものといえる(同図下)。土師器は合計10個体に接合・復元された。内訳は、低脚杯2点、小型の複合口縁壺3点、中型の複合口縁壺1点、鼓形器台1点、高杯3点(うち2点を図化)である(第15図)。完全な形を留めるのは低脚杯の1点(同図2)だけである。

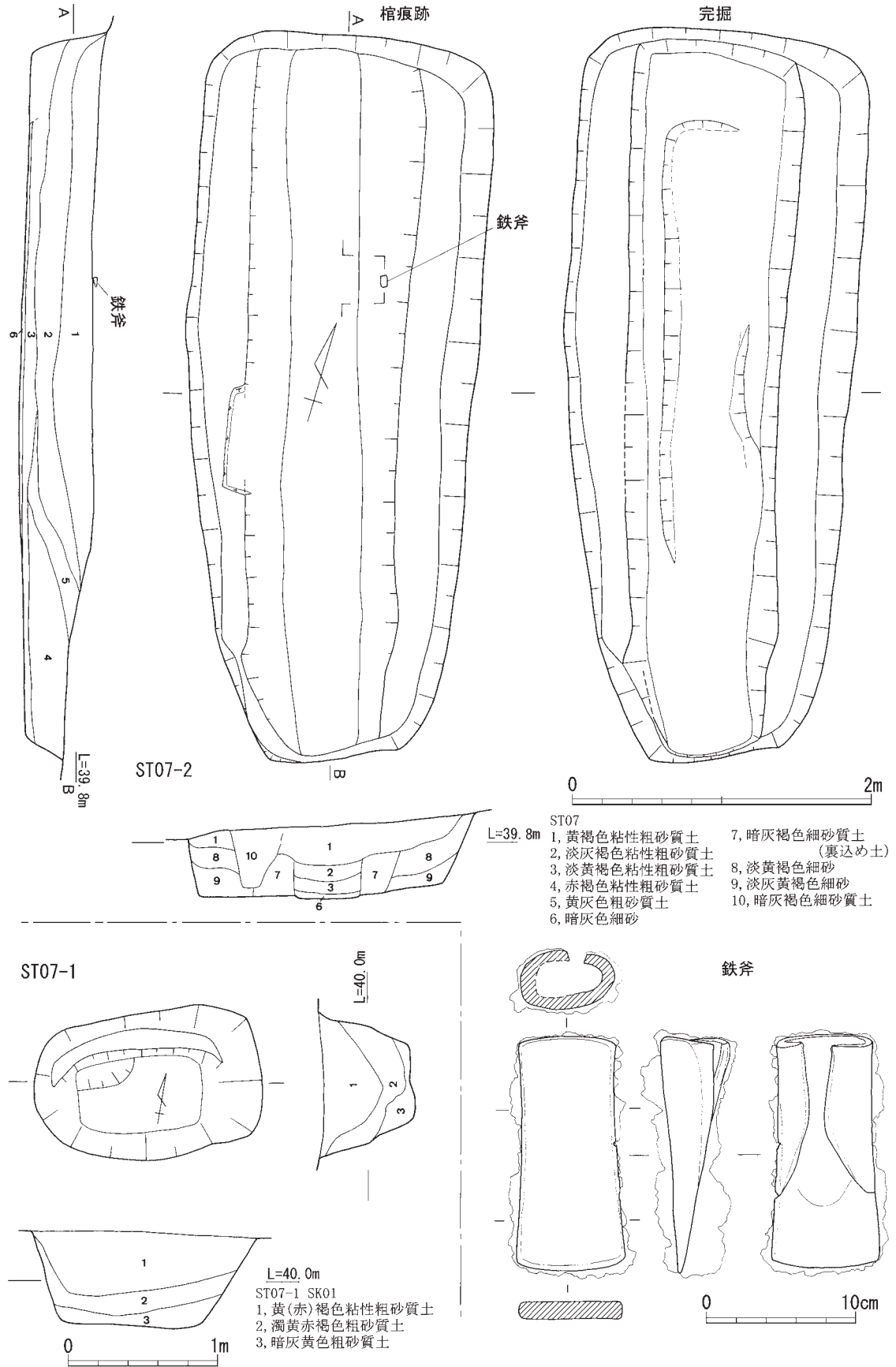
出土遺物は、土師器10点である。第15図1・2の低脚杯は、蓋との見方もあるが、弥生時代からの系譜が追えることから杯とみるのが主流である。橙褐色の色調で1.5mm以下の砂粒が多い胎土である。杯部の口縁部径は1が15.7cm、2が16.8cm、底径は1が4.7cm、2が4.6cm、器高は1が5cm、2が5cmを測る。3～5は丸底の複合口縁壺である。口縁部から山陰系の特徴をもつ。いずれも淡橙褐色で、2mm以下の白色の砂粒が多く含まれる。口縁部径・体部最大径・器高は、復元値も含めて3が13.7・14.7・14cm、4が12・15.6・14.3cm、5が12.6・16・16cmを測る。体部は最大径がその中間にくる球形に近いもので、外面をハケメ調整する。6は、やや長胴で口縁端部が直に立ち上がる中型の複合口縁壺である。口縁部径18.8cm、体部最大径35.4cm、器高(推定)48.5cmを測る。張り出す肩部が最大径となり、体部中間にくるものよりも古式の様相を示している。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリの調整がある。丸底の底部に内側からの穿孔がみられる。7は鼓形器台である。淡橙黄褐色で、口径17.6cm、頸部径9.8cm、裾部径17.4cm、器高10cmを測る。受け部の突帯の稜は鋭い。8と9は高杯である。ともに脚部は裾部から滑らかに屈曲する形である。8の深い杯部は口径17.7cm、深さ5.5cmを測り、外面に縦方向のハケメがみられる。暗橙褐色で砂粒の多い胎土である。

### (3) 7号墳

#### ①墳形・規模・外表施設

今回調査地の最高所(標高45m)に造られた古墳である。南北8m、東西7m以上を測る台形状である(第2図)。墳丘盛土はみられず、岩盤(花崗岩質)を削り出して整形している。裾部の地形改変はみられない。

#### ②埋葬施設と出土遺物



第16図 7号墳埋葬施設 ST07-1・2 および有袋状鉄斧 (ST07-2 棺外)

埋葬施設は土坑状のもの1基（ST07 - 1）と、木棺を納めたもの1基（ST07 - 2）である。

#### 埋葬施設 ST07 - 1（第16図左下）

最高所である7号墳頂部に掘られ、平面形は楕円形で、長軸1.5m、短軸1m、深さ60cmを測る。木棺の痕跡や、土器などの出土は確認されなかったが、西側の埋葬施設ST07 - 2と同時期で、埋葬に伴うものであろう。

#### 埋葬施設 ST07 - 2（第16図上）

南北を主軸にもつ木棺墓である。墓壙の平面形は隅丸長方形に近いが、南側にむかって狭くなっている。南北4.7m、東西は北側で2m、南側で1.4m、深さは北側で45cm、南側で30cmを測る。二段に掘り込まれた墓壙の底に、木棺が納められたものと考えられる。棺の大きさ・構造については、土層断面観察から、長さ3m、幅55cmほどの組み合わせ式の箱形木棺であった可能性が高い。遺物は墓壙内から有袋状鉄斧が1点出土した。棺内から遺物は出土していない。

出土遺物は有袋状鉄斧（第16図右下）1点がある。長さ15.5cm、最大幅7cm、厚さ4.6cm、素材の厚さ6mm、重さ89gを測る。袋状内の装着部には、柄の木質部が明瞭に付着している。高木清生氏の分類<sup>(註7)</sup>によると、II a - 2類（無肩鉄斧で刃部幅が基部幅の2倍未満）に相当する。弥生時代からの系譜をひき、有袋状鉄斧では最も出土量の多いタイプである。

### （4）8号墓

#### ①墳形・規模・外表施設

5号墳頂部から下へ、約2.5mの段差をもつ位置に造られている。墳頂平坦部は南北7m、東西8mを測る台形である（第2図）。狭い平坦部ながら、南北方向に主軸をもつ埋葬施設が3基みつかった。地山削り出しで盛土はないが、埋葬施設を被う土が薄く残存している。また、直線的な区画溝が5号墳との境に2条掘られ、そのうちの西側の溝は埋葬施設ST08 - 1で壊されている。

#### ②埋葬施設と出土遺物

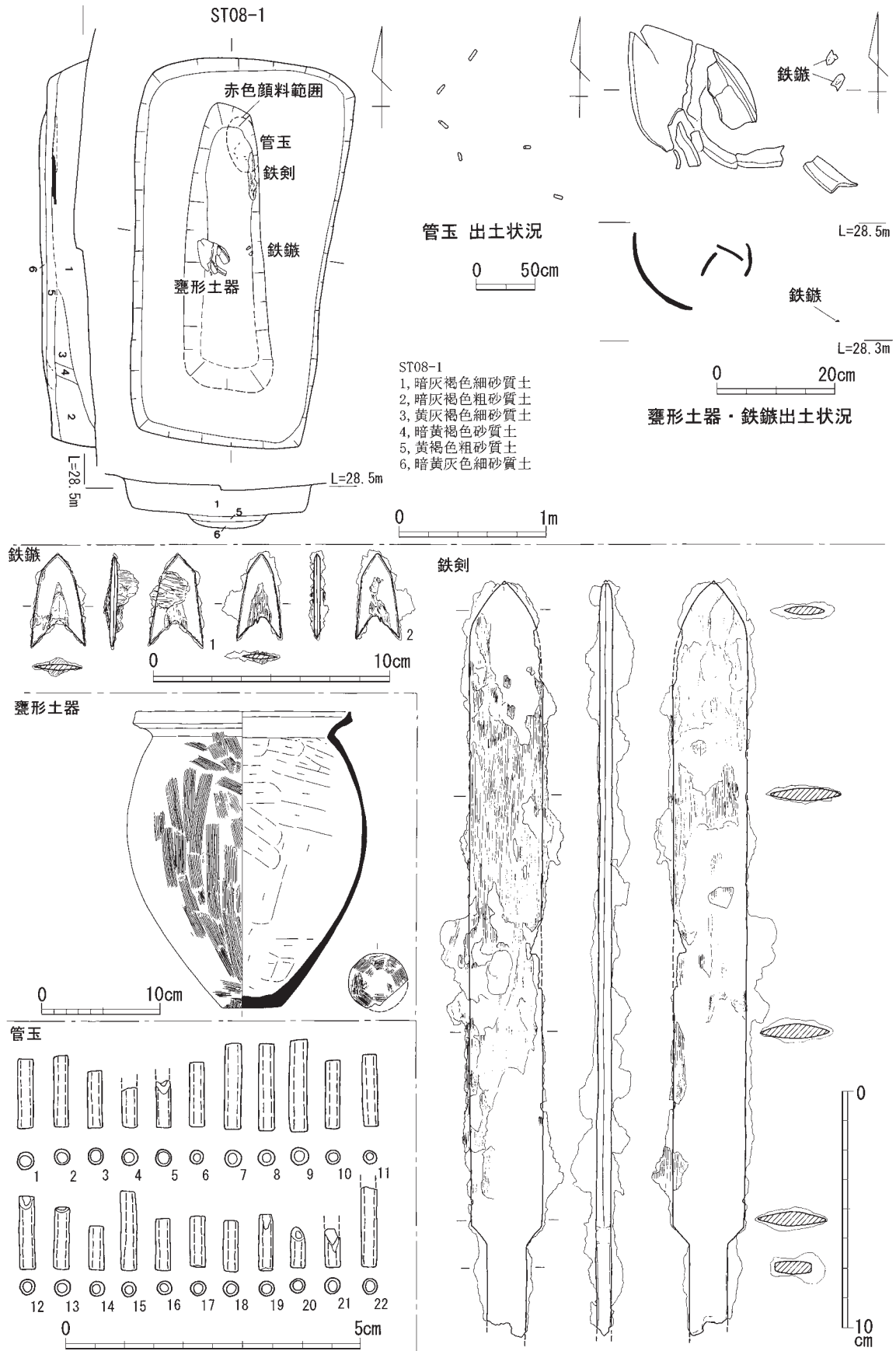
3基の埋葬施設（ST08 - 1・ST08 - 2・ST08 - 3）がある。出土遺物および土層の観察から、築造順はST08 - 2→ST08 - 3→ST08 - 1と考えられる。

#### 埋葬施設 ST08 - 1（第17図）

平坦部の最も東側、5号墳の裾部との境に設けられた埋葬施設である。長辺2.7m、短辺1.2～1.4m、深さ0.3mの大きさで、平面形は、北辺がやや広い隅丸長方形である。墓壙の浅さから、かなり削平が進んだものとみられる。棺の形態は掘形の幅が北側でやや狭くなるため、くり抜き形の舟底状木棺が納められていたと推察される。なお副葬された遺物のあり方から、頭位は北側と考えられる。

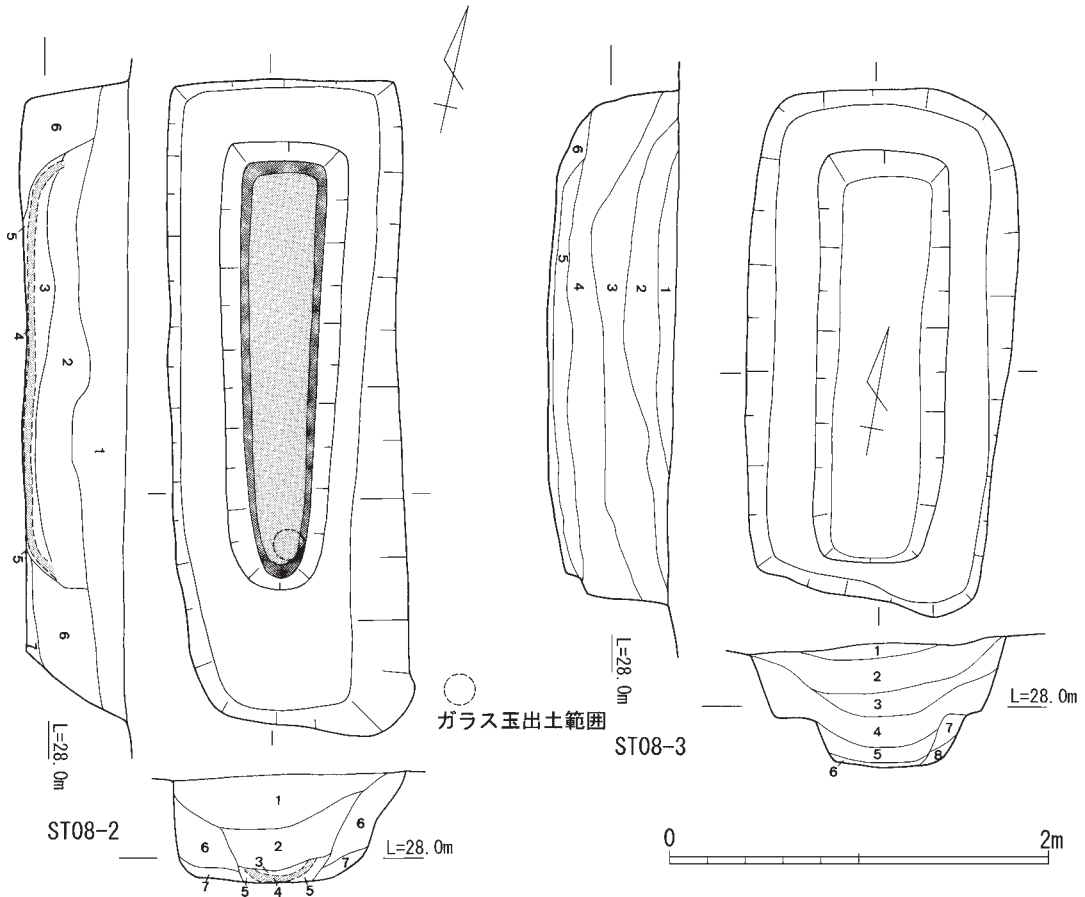
棺上から弥生土器の甕1個体と、棺内から鉄鏃2点、鉄剣1点、管玉22点がある（第17図下半）。鉄剣は切っ先を南に向け、その剣の基部付近と一部重なる範囲から管玉が集中的に出土した。そして管玉と剣の上には少量ながら赤色顔料の散布が認められた。

出土遺物には、弥生土器甕、鉄鏃、鉄剣および管玉がある。第17図の弥生土器の甕は、口縁



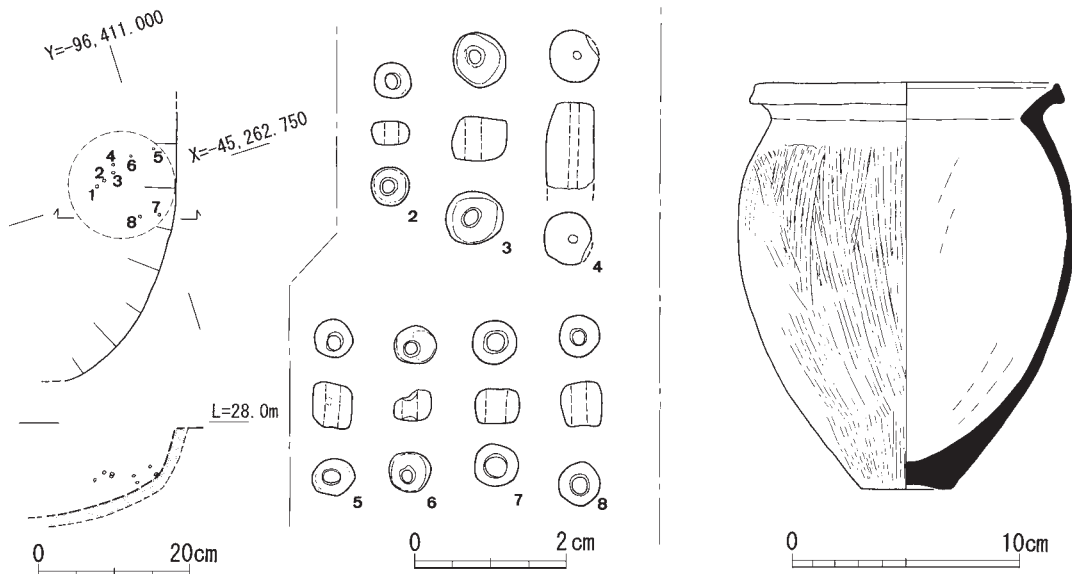
第17図 8号墓埋葬施設 ST08 - 1 および遺物 (鉄製品・甕形土器・管玉)





- ST08-2
- 1, 淡黄灰色粗砂質土
  - 2, 暗黄褐色粗砂質土
  - 3, 淡黄灰色細砂
  - 4, 暗黄灰色細砂(棺材)
  - 5, 黒灰色細砂
  - 6, 灰茶褐色粗砂質土
  - 7, 茶褐色粗砂質土
- 棺痕跡

- ST08-3
- 1, 黄灰色粗砂質土
  - 2, 黄褐色粗砂質土
  - 3, 暗黄褐色粗砂質土
  - 4, 黄赤褐色粗砂質土
  - 5, 淡赤褐色粗砂質土
  - 6, 淡黄灰色細砂質土
  - 7, 淡灰黄色粗砂質土
  - 8, 暗灰黄色細砂質土



ST08-2 玉類出土状況 ガラス玉 (管玉: 4 小玉: 2・3・5~8)

甕形土器

第18図 8号墓埋葬施設 ST08-2・3 および遺物 (ガラス玉・甕形土器)

部径 18cm、器高 25.2cm、体部最大径 20.5cm、底部径 5cm を測る。釣鐘形の体部で、頸部～口縁部は「く」の字状、口縁端部は上方にやや拡張させている。調整は体部外面をハケ、内面をヘラケズリし、底部にも細かなハケメがみられる。

第 17 図の鉄鏃 1 と鉄鏃 2 は、無茎凹基式の三角形鏃で、逆刺の先端は鋭く尖り、鏃身とも鋭利で精美な仕上がりを見せる。類例として大宮町三坂神社墳墓群 3・4 号墓から出土したものがある。<sup>(注8)</sup> 2 点とも矢柄との装着部分に木質が残り、特に鉄鏃 1 は断面円形の矢柄が良好に観察される。さらに鉄鏃 1 の片面には棺材とみられる木質部が大きく付着している。鉄鏃 1 は長さ 4cm、幅 2.3cm、厚さ 0.28cm、重さ 5g、鉄鏃 2 は、長さ 3.6cm、幅 1.9cm、厚さ 0.22cm、重さ 3.4g を測る。剣は、茎の端部を欠く。残存長 32cm、幅 3cm、厚さ 0.6cm で、剣身部の長さ 27.8cm、関から茎の残存長 4.2cm である。鞘に納められていたため、両面に顕著な木質が付着している。

管玉は合計 22 点である(第 17 図左下)。緑色凝灰岩製で淡緑色を呈し、細身の繊細なものである。長さは 0.74～1.4cm、径 2.1～2.9mm、重さ 0.06～0.11g を測る。穿孔は両面とみられるものが多いが、15・20・21 は片面穿孔とみられる。

#### 埋葬施設 ST08 - 2 (第 18 図左上)

3 基ある埋葬施設の中央に位置する。長辺 3.45m、短辺 1.25m、深さ 0.55m の方形である。墓壇の底には舟底状のくり抜き式木棺が納められ、長さ 2.2m、幅 0.2～0.4m、深さ 20cm の残存値を測る。棺材の木質と土の置き換わった部分の厚さは約 6cm である。棺内からはガラス製玉類 8 点がおおよそ直径 20cm の範囲にまとまって出土した。頭位は南側であろう。

出土遺物には、ガラス製玉類 8 点がある(第 18 図 2～8)。種類の内訳は管玉 1 点(4)、小玉 7 点(2・3・5～8)である。なお小玉の 1 点(1)は風化がすすんでおり、取り上げ時に粉化してしまったため図示できていない。7 点はこれを含めた点数である。小玉はすべて淡青色、管玉は透明度の高い淡青緑色である。管玉は残存長さ 1.1cm、直径 6mm、重さ 0.7g、小玉は高さ 3～6mm、直径 5～7mm、重さ 0.09～0.44g を測る。

#### 埋葬施設 ST08 - 3 (第 18 図右上)

3 基並んだ西端に設けられた木棺墓。掘形の平面形は、長辺 2.8m、短辺 1.4m、深さ 0.65m を測る隅丸方形で、南東隅がやや不整形に張り出す。棺痕跡は断面観察などから、くり抜き式の木棺であると判断した。墓壇内・棺外から弥生土器の細かな破片が散布したように出土し、破片の接合によりほぼ 1 個体の甕となった。墓壇内破碎土器供献の一例である。

出土遺物は、甕 1 点である(第 18 図右下)。端部をやや肥厚させて面を作り出した口縁部や、釣鐘状の体部をもつ。口縁部径 13.2cm、器高 17.9cm、体部最大径 14.3cm、底部径 4cm を測る。体部外面をハケ目、内面をヘラケズリ調整する。

### (5) 9 号墓

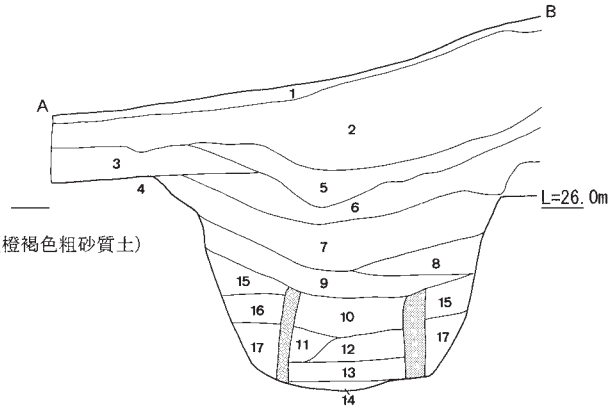
#### ① 墳形・規模・外表施設

今回の調査範囲で最も低位の尾根上にある。掘削前の地形から埋葬施設の有無を判断することはできない。尾根の上位から流れてきた土砂が約 80cm の厚さで堆積しているが、墳丘は地山の

9号墓第1・第2主体部

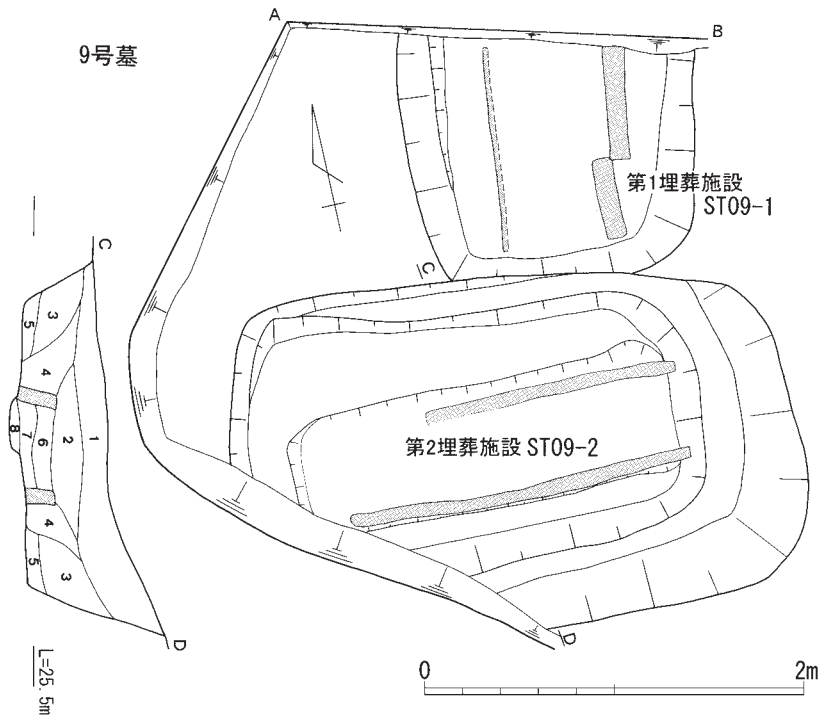
ST09-1

- |               |                        |
|---------------|------------------------|
| 1, 表土 (黒色腐植土) | 15, 淡橙褐色粗砂質土           |
| 2, 暗灰褐色細砂質土   | 16, 暗橙褐色粗砂質土           |
| 3, 暗赤褐色砂質土    | 17, 暗橙褐色粗砂質土           |
| 4, 黒灰色粗砂礫(地山) | (15~17は裏込め土)           |
| 5, 黒色細砂質土     | スクリーントーンは棺材部 (橙褐色粗砂質土) |
| 6, 黄灰色粗砂質土    |                        |
| 7, 淡茶褐色粗砂質土   |                        |
| 8, 淡橙褐色粗砂     |                        |
| 9, 淡黄茶褐色粗砂質土  |                        |
| 10, 淡黄灰色粗砂    |                        |
| 11, 淡橙褐色粗砂    |                        |
| 12, 橙褐色粗砂     |                        |
| 13, 黄褐色粗砂質土   |                        |
| 14, 淡黄褐色粘質土   |                        |
| (10~14は棺内)    |                        |



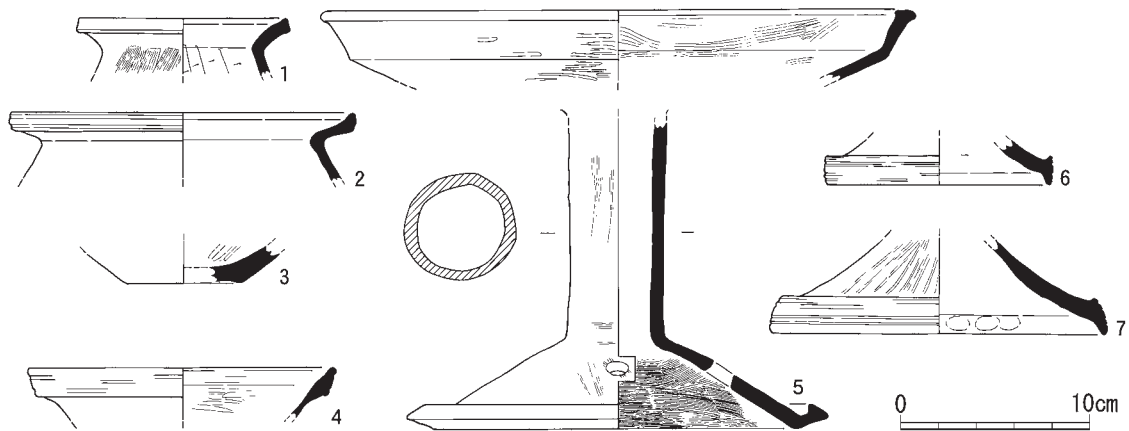
9号墓

■ 棺痕跡



ST09-2

- |                        |
|------------------------|
| 1, 暗灰褐色粗砂質土            |
| 2, 淡赤灰褐色粗砂質土           |
| 3, 茶褐色粗砂質土             |
| 4, 灰茶褐色粗砂質土(裏込め土)      |
| 5, 灰橙褐色粗砂質土            |
| 6, 淡灰褐色細砂質土            |
| 7, 淡灰褐色粗砂質土            |
| 8, 灰褐色細砂質土             |
| スクリーントーンは棺材部 (暗褐色細砂質土) |



第19図 9号墳埋葬施設ST09-1・2平・断面図と出土土器

削り出しにより整形され盛土は施されない。墳頂平坦部の規模・形状は南北6m、東西4mの台形と推測される（第2図）。また、8号墓との境界を示す区画溝が1条掘られている。溝の規模は長さ3.5m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。

## ②埋葬施設と出土遺物

主軸方向を南北にとるST09-1と東西とするST09-2の2基がある。

### 埋葬施設ST09-1（第19図上）

墓壙規模は調査区北壁により全体規模は不明であるが、長辺1.3m以上、短辺1.55m、深さ1mを測る。墓壙の底に、組み合わせ式の箱形木棺が納められていたと考えられる。東辺の木棺痕跡が中間部で断裂しているのが観察された。棺材の厚さは東側板でみると約10cmと厚く、立ち上がりは50cmを測る。棺内からの出土遺物はないが、墓壙中から弥生土器の破片が出土した。墓壙内破碎土器供献とみられ、土器の器種は甕、器台、高杯である（第19図下）。

出土遺物は弥生土器7点である。第19図1は、くの字形口縁で端部に面をもつ小型の甕である。2は、くの字口縁の端部を上には拡張し、端面に2条の凹線をとどめている。3は甕の底部である。4は器台の口縁部で、拡張させた端面に擬凹線が施されている。5は杯部と脚注部に接点はないが、2点が近接して出土したことから同一個体とみる。口縁部径30cm、脚柱部径5.3cm、底径19.3cmを測る。暗赤褐色の精良な胎土である。弥生時代後期（第V様式中葉）の京丹後市丹後町大山墳墓群に類例がある。6・7は内面にわずかにケズリの痕跡がみとめられることから器台の脚部とした。弥生時代後期中葉の時期を示す一群である。

### 埋葬施設ST09-2（第19図上）

墓壙規模は長辺3.1m、短辺1.9m、深さ0.5mを測る。墓壙の底に組み合わせ式の木棺が納められたとみられる。棺痕跡の立ち上がりは20cmで、長辺1.8m、短辺0.6mである。棺内から遺物は出土しなかったが、墓壙内から弥生土器の細片がわずかに出土した。

## 6、まとめ

今回の調査により、茶臼ヶ岳5号墳をはさんで、高所に古墳2基（6・7号墳）、低所に弥生時代台状墓2基（8・9号墓）が新たにみつき、さらに平安時代の経塚1基の存在も明らかとなった。

茶臼ヶ岳5・6・7号墳からは木棺を納めた埋葬施設が5号墳から2基（くり抜き式の舟底状木棺）、6号墳と7号墳から各1基（組み合わせ式の箱形木棺）みつかった。5号墳では、埋葬施設ST05-1に接して2基の土器棺墓も検出している。墓壙および棺内から遺物が出土したのは、7号墳と6号墳だけで、6号墳では破損したヤリガンナとみられる鉄製品1点が棺内から、7号墳では有袋状鉄斧1点が墓壙内から出土した。墓壙・棺内からの遺物が少ない反面、墓壙周縁部で、破碎土器供献が5号墳第2埋葬施設と6号墳の墳頂部東側の土器溜まりなどで確認された。6号墳の土器溜りは10個体におよぶ多量の土器破碎供献である。5号墳と6号墳のように、棺内の副葬品を極端に少なくする反面、墓壙上やその周縁での儀礼を重視する傾向は、古墳時代



前期中頃の奈良古墳群（弥栄町）でも確認されている。<sup>(注9)</sup> 破碎供献の土師器類の形態（布留Ⅰ～Ⅱ式）から、5・6・7号墳は古墳時代前期前半（4世紀前半）に築かれたといえる。

弥生時代台状墓の8号墓と9号墓は、8号墓から3基の埋葬施設、9号墓から2基の埋葬施設がみつかった。8号墓の3基はくり抜き式木棺、9号墓の2基は組み合わせ式の箱形木棺であった。8号墓の埋葬施設ST08-1の棺内外からは、比較的豊富な遺物・副葬品が出土した。弥生時代後期中葉とみられる甕が棺上から、鉄剣・鉄鏃・管玉が棺内から出土した。

また8号墳埋葬施設ST08-2の棺内からはガラス玉類が出土した。しかし、8号墓埋葬施設ST08-3および9号墓の2基の埋葬施設については、棺内に遺物を入れず、墓壙内破碎土器供献がみられた。丹後・但馬地方における当該期の埋葬施設の多くにみられる事象である。8号墓と9号墓の築造年代は、出土遺物からほぼ弥生時代後期中葉としておきたい。なお、舟底状木棺としては数少ない古い事例となる。

経塚は、構造を示す石室はほとんど全壊しているが、埋納された須恵器壺と土師器質の筒形外容器の残りは良好であった。近隣では多数の経塚を出した久美浜町佐濃谷川流域の豊谷経塚（平安時代末から鎌倉時代）<sup>(注10)</sup>がある。この豊谷経塚から、最初に掘られた主土坑と、これに付随し横穴、石組などを設けるために掘られた埋納土坑との区別のない形態のものが検出されている。今回の経塚に類似する形態で、このことから本経塚もほぼ同時期としておきたい。なお、本経塚の墳墓としての可能性については、火葬骨の残存がまったくないこと、埋葬空間をもつ墳墓としては覆土があまりにも薄いことなどから疑問がある。

今回の調査でみつかった弥生時代後期から古墳時代前期の台状墓と古墳、さらに平安時代末から鎌倉時代の経塚は、当地域における歴史を考古学的に研究するための貴重な資料となった。今後とも周辺におけるさまざまな遺跡の調査に期待したい。

注1 京都府教育委員会編「3埋蔵文化財包蔵地地名表（1）久美浜町」（『京都府遺跡地図〔第3版第1分冊〕8頁）2001

注2 作業員 岡田道彦 小森明美 佐々木司郎 多田定子 田中忠男 田中靖彦 田中富男 辻岩男 壺昌子 寺田範明 西田けい子 松田久美子 保田広美 吉谷千秋  
調査補助員・整理員 奥田栄吉 岡田代志乃 中島恵美子、川村真由美

注3 肥後弘幸「墓壙内破碎土器供献—北近畿弥生墳墓土器供献の—様相—」（『みずほ12・13号』大和弥生文化の会）1994、松井敬子「破碎土器の埋納について—豊岡市神美地域を中心として—」（『但馬考古学6』）但馬考古学研究会 1991などに詳しい。

注4 田代弘「9. 北谷古墳群」（『京都府遺跡調査概報 第65冊』106頁（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1995

注5 石崎善久「舟底状木棺考—丹後の刳抜き式木棺—」（『京都府埋蔵文化財論集 第4集—創立二十周年記念誌』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001

京丹後市久美浜町内では南谷1号墳の埋葬施設で確認されている。

石尾政信「南谷古墳群」（『京都府遺跡調査概報 第89冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1998

- 注6 森島康雄・村田和弘「天王山古墳群B支群1号墳経塚」（『京都府埋蔵文化財情報 第91号』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004
- 注7 高木清生「第2節 古墳出土の有袋鉄斧－無肩鉄斧の型式を中心に－」（『白米山西古墳群発掘調査報告書 奈良女子大学考古学研究報告1』奈良女子大学文学部）2000
- 注8 肥後弘幸・橋本勝行・今田昇一他『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』（『京都府大宮町文化財調査報告書 第14集』大宮町教育委員会）1998
- 注9 河野一隆「2. 奈具墳墓群・奈具古墳群」（『京都府遺跡調査概報第65冊』37頁 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1995
- 注10 肥後弘幸「〔3〕豊谷経塚」（『埋蔵文化財発掘調査概報1992』京都府教育委員会）1992

# 圖 版



(1) 調査地全景（伐採後、南から）



(2) 調査地全景（遺構検出後、空中写真、東から）



古墳・台状墓検出状況（東から、空中写真）





(1) 5号墳全景（南東から）



(2) 5号墳埋葬施設S T 05 - 1（西から）



(1) 5号墳土器棺墓1 (東から)



(2) 同上 (南から)



(3) 同上 (西から)



(1) 5号墳土器棺墓2 (口縁部分、東から)



(2) 同上 (北西から)



(1) 5号墳埋葬施設S T 05 - 2 出土土器 (墓壙上、東から)



(2) 5号墳埋葬施設S T 05 - 2 (北から)





(1) 経塚検出状況（5号墳丘上、北から）



(2) 同上（東から）



(3) 埋納土器・石製品





(1) 6号墳埋葬施設（東から、空中写真）



(2) 6号墳埋葬施設・小土抗（北から）



(1) 6号墳土器溜り（南から）



(2) 6号墳土器溜り、複合口縁壺（北西から）



(1) 7号墳埋葬施設（西から、空中写真）



(2) 7号墳埋葬施設 S T 07 - 2（東から）



(1) 8号墓検出状況（南西から）



(2) 同上（東から）





(1) 8号墓棺上土器



(2) 8号墓棺内鉄鍬



(3) 8号墓埋葬施設S T 08 - 1 (北から)





(1) 8号墓埋葬施設S T 08 - 2 (北から)



(2) 8号墓埋葬施設S T 08 - 3 (南から)



(1) 8号墓・9号墓（東から、空中写真）



(2) 9号墓埋葬施設ST 09 - 1・ST 09 - 2手前（南から）



(1) 9号墓埋葬施設S T 09 - 1、中間断面（南から）



(2) 9号墓埋葬施設S T 09 - 1 墓壙内出土弥生土器（南から）



(1) 9号墓埋葬施設S T 09 - 1 (北から)



(2) 9号墓埋葬施設S T 09 - 2 (東から)

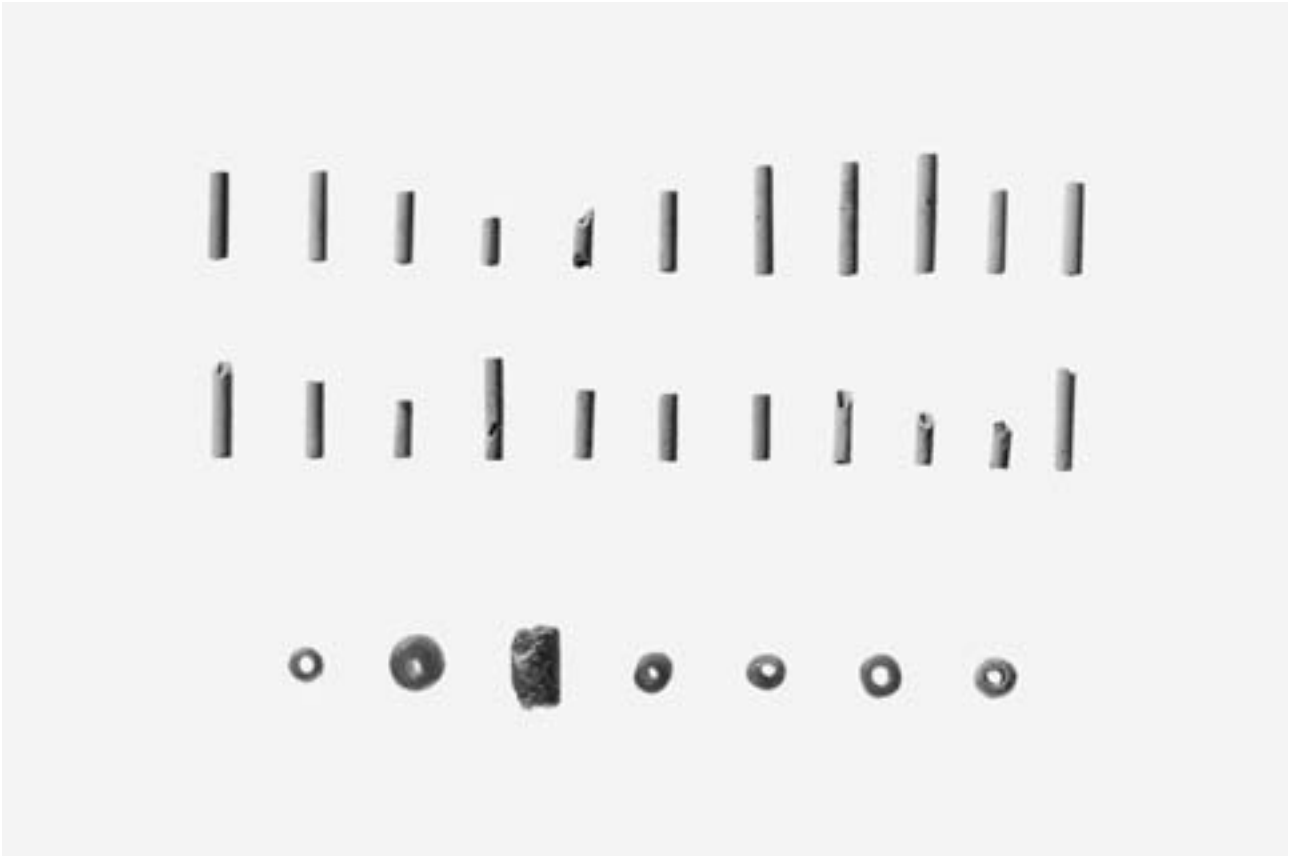


5号墳土器棺墓1・2、S T 05 - 2 出土土器（番号は挿図 No.）





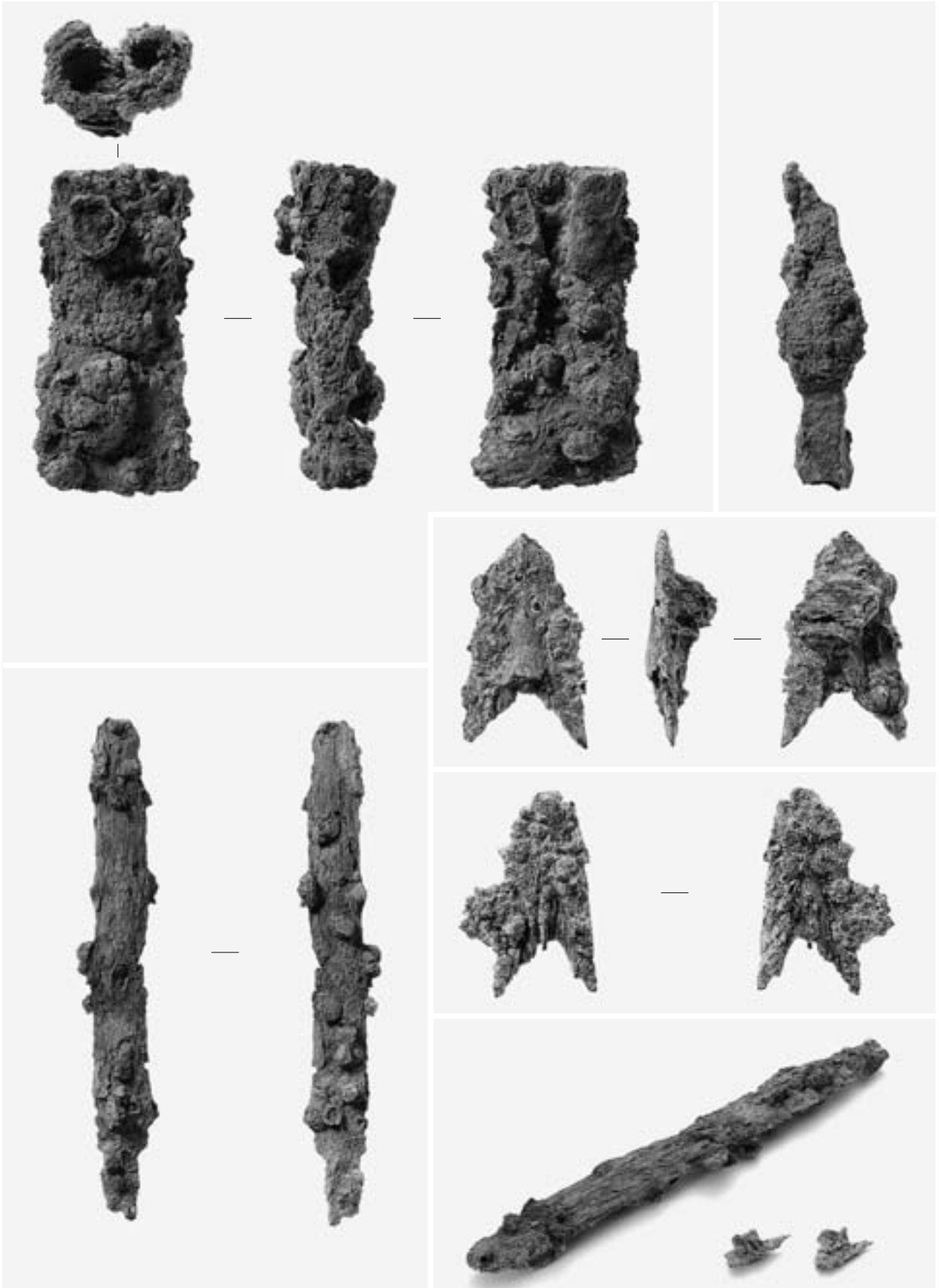
経塚および6号墳土器溜り出土遺物（番号は挿図No.）



(1) 8号墓出土玉類 (上2段S T 08 - 1、下段S T 08 - 2)



(2) 8号墓出土弥生土器 (左S T 08 - 1、右S T 08 - 3)



6・7号墳および8号墓出土鉄製品

茶臼ヶ岳古墳群の調査では、丘陵尾根上において弥生時代後期の方形台状墓2基、古墳時代前期の方墳3基を検出した。各々から木棺を納めた埋葬施設や壺棺、破碎土器供献とみられる土器溜りなどを確認した。さらに平安時代の経塚1基を検出した。

鹿背山瓦窯では、昨年度に瓦窯跡2基を検出しており、その瓦窯に関連して調査を進めたところ、瓦窯に関連した掘立柱建物跡1棟、粘土取り穴、通路2条を検出した。これらの遺構の検出により、瓦生産工程が明らかとなるとともに、出土瓦の検討から平城宮へ瓦を供給した官営瓦工房であることが明らかとなった。

馬場南遺跡は遺跡の範囲とその性格を確認するための試掘調査であり、この調査の結果、掘立柱建物跡1棟のほか、溝を検出した。溝内からは施釉陶器のほか、「神雄寺」などと墨書された須恵器が出土し、奈良時代の一般集落との異なる性格の遺跡と想定される遺跡である。

第901次調査では、古墳時代初（庄内期）の流路跡を確認し、流路内から良好な状況で土器が出土した。また、包含層中から縄文時代晩期の凸帯文土器も出土した。

第902次調査では、上内田地区において庄内期の竪穴式住居跡の一部を確認した。その他、試掘調査地では、本発掘調査につながる顕著な遺構遺物の検出は無かった。

第926次調査では、上内田、調子地区において古墳時代の土坑や平安時代の溝などの遺構を確認した。

第928次調査では、上内田地区において第902次調査試掘調査で確認していた竪穴式住居跡を面的に広げ、庄内期の多角形住居跡であることが判明した。また、調子地区では、平安時代後期の土坑を確認した。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

## 京都府遺跡調査報告集 第131冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141